

死刑確定者の家族について 考えたことはありますか？

死刑確定者にも、家族がいます。

親、きょうだい、パートナー、若い子ども。

事件の発生から死刑の確定後まで

家族はどのような経験をし、

どのような思いを抱くのでしょうか。

メディアによる有形無形の暴力

「逮捕直後はメディアが押しかけて、勝手に扉をあけて家の中まで入ってきたり… 私たちが怒るところを撮りたかったのかも。でも、怒る元気もありません。」

「記者が押しかけてきて以来、母は寝込んでしまった。」

孤独・孤立

「事件後は、とにかく人に会わないように、家から出なかった。」

「世間とは距離を置いて生活した。同窓会にも行かなかった。」

「死刑が確定したときは、報道陣だけでなく、支援者も、弁護士までも、みんな『敵』に見えた。」

差別と偏見

「結婚するときにも、先方の親には反対された。結婚したあとも、わざわざ事件の新聞記事の切り抜きを、結婚相手に匿名で送りつけてくる人もいた。」

死刑執行の恐怖

死刑の執行については、当日の朝、突然、死刑確定者本人に知らされ、その後直ちに執行が行われます。家族は事前に知らされることはなく、執行後に拘置所から連絡を受けます。

「毎日のニュースで『死刑確定』『死刑執行』という文字が気になる。」

「2文字が一番怖い。『死刑』という2文字が一番怖い。」

「面会が終わり手を振って別れるとき、いつまでこの手を振れるのかなと思う。ただ、あの子が元気でいてくれればいい。あの子より先に死にたい。」

死刑制度への思い

「事件の前は、死刑制度はあって当たり前だと思っていた。今は、いくら重い罪を犯した人でも、死刑は国が殺人をすること。あってはいけないと思う。」

「加害者の家族としては、死刑には反対。でも、被害者のことを考えると、そうはいえない。」

以上は、CrimeInfo が、欧州連合代表部による助成 (PI/2021/428-535, 2022-2024) を受けて実施した調査によるものです。



CrimeInfo とその活動について : <https://www.crimeinfo.jp/>



翻訳資料 : 「拘禁された親を持つ子ども — 国際基準とガイドライン」 2020年3月



映像資料 : 「被拘禁者を親に持つ子どもたち」 CrimeInfo 世界人権デー企画 2021年12月10日開催